



連載 I
あの町この町
第59回

デニムの聖地——岡山県・井原市

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラスト＝著者)

岡山県井原市は福山の北東、約二十キロ。人口四万三九二七人（平成22年）。岡山県の西端にあたり、市域が広島県と接している。

いま「シニア」などと呼ばれている世代のなかには、「デニムの町」として記憶している人がいるだろう。厚手の綿布であって、デニムを生地にしてジーンズがつくられる。ジーンズがまだ珍しかったころ、田舎の高校生は「リーバイ」とともに「イバラ」を知った。リーバイは本場アメリカのジーンズの名門だが、イバラが負けず劣らず優れたジーンズをつくっている。井原製デニムは世界最高品質がうたわれ、アメリカの業者が買いにくる。それにしても地図を開いて、あらためて知ったのだが、井原市は岡山でも内陸部であって、こちらもけっこうな田舎町なのだ。どうしてこの町が、世界のリーバイと張り合うまでになったのだろうか？

いまでこそ「ジープ」こういった和製英語さえあり、すっかり日常着の一つになったが、ジーンズが入ってきた当初は、不思議さまるしるものだった。それまではヒダつきで、きちんとアイロンをあてたのがズボンだった。アイロンが面倒なときは、寝るときズボンをフトンの下に敷いて寝押しをした。

ところがジーンズにはヒダなど一切ないのである。そもそも生地が大きいので、コットンなのに厚ぼったくてゴアゴアしている。やわらかい人体をつつむものとは、とても思えない。むしろ荷物を運ぶときの梱包に

ピッタリである。実際、元来は梱包用であった綿布を、リーバイ・ストラスという抜け目のないアメリカ人が衣服に転用することを思い立ち、丈夫な労働着として売り出したのがはじまりらしい。それがしだいに市民生活に入りこみ、日常はもとより、フォーマルな場にもあらわれだした。形どおりのヒダつきズボンの正反対であるからこそ、それ自体で個性的なオシヤレ着になる。

わが同世代ではジェームス・デイーンと「ウエストサイド物語」が大きかった。二十四歳で死んだ俳優ジェームス・デイーンはジャンパーにジーンズがよく似合った。アラン・ドロンの風の三つ揃いなど考えられない。「ウエストサイド物語」の貧しい若者たちには、ジーンズ以外のはきものはなかったはずだ。それにしても脚にはりついたような硬いズボンで、どうしてジョージ・チャキリスは、あのようにめまぐるしいテンポで踊ったり跳んだりできたのか。田舎の高校生は神戸へ出かけてアメリカ軍放出品専門店を探しあて、なけなしの財布をはたいて夢のズボンを手に入れたが、なぜかデイーンにも、チャキリスにもなれなかった。どんなにポーズをとってみても、色の褪せた汚ならしいズボンとしか見えないのである。うかつにもジーンズには、長い脚という不可欠の条件があるのを忘れていた。

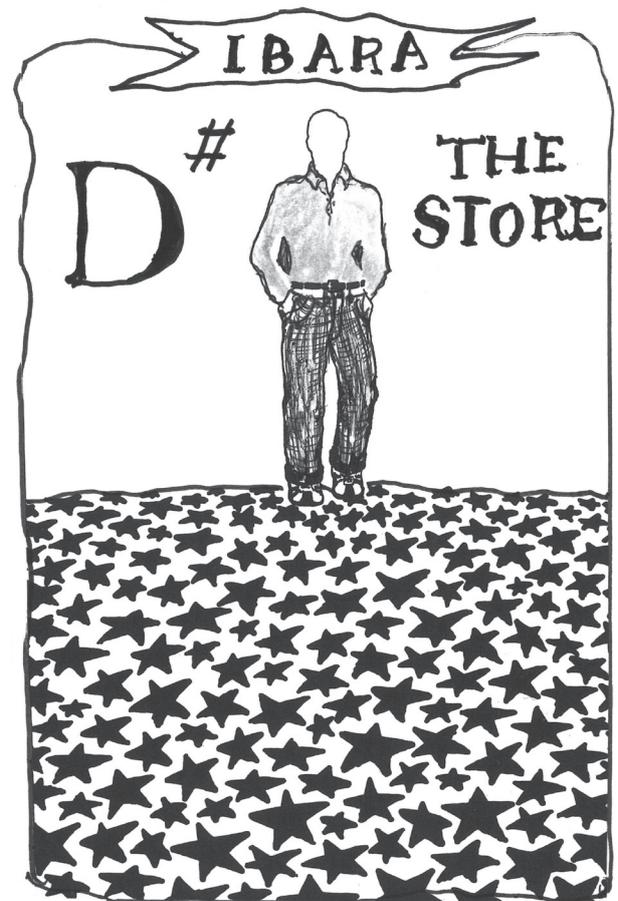
せっかくジーンズの里に行くのだから、愛用のジーンズで出かけるこ

とにした。おもえば二十年以上もはきつづけている。洗いざらしが、いづくあいにこすれて、いわゆるジーンズの「ヒゲ」になった。シェービングして「ヒゲ」をつくる人もいるが、歳月が適度の色落ちをしてくれた。知られるようにジーンズの場合、新品をわざわざ軽石でこすって中古感を生み出す。その特徴一つからも、衣服史のなかの異端児であることがよくわかる。

それにしても、どうやって行くのか？ 井原には井原鉄道が走っている。内陸部の私鉄はふつう幹線の都市と結ばれているものだが、井原鉄道は山陽道の倉敷とも福山とも直接つながっていないのだ。倉敷からだとは伯備線に乗り換え、途中の清音で再度乗り換える。福山からだとは福塩線に乗り換え、あらためて神辺で井原線に乗り継がなくてはならない。倉敷と福山のほぼ中間の笠岡が直線距離で井原にもっとも近く、ここからバスを使うと約三十分。少ない便数をメモして、ジーンズのお尻のポケットに押しこんだ。とたんにまたもや先ほどの疑問が頭をかすめた。こんなに不便なところにあつて、「イバラ」はどうして「リーバイ」のライバルになることができたのか。

バスにして正解だった。中国地方特有のゆるやかな山地を走っていたのが、井原市にさしかかると急カーブして斜面を下り下る。町がパノラマ状に手にとるように見えた。西から東へ流れる川沿いにひらけていて、中心部はきれいな碁盤目をしている。きわめて計画的な町づくりがされたのだろう。軸にあたる幹線が交叉する四つ辻は広場状のふくらみもち、その基点には白銀色の大屋根と大きな広場が見える。眠りこけたような内陸部の小都市を想像していたので、わが目を疑った。

電車で来たわけではないが、井原駅頭に降り立った。駅舎の壁に「デ



ワンランク上「#」は井原の井とDはDENIMのD

ニムの聖地」とあつて、ショールーム兼ショップがある。手織りの織り機やミシンがオープンスタイルの作業スペースをつくっている。井原被服協同組合の運営で、店名が「ディー・シャープ・ザ・ストア」。デニムのD、音楽記号の#（シャープ）が井原の井とかけてあつて、ワンランク上をあらわしているそうだ。

それはいいのだが、入口に段ボールが積み上げてあつて、デコレーションが古びている。ストア全体がややしょぼくれた感じで、オシャレな小冊子「デニムができるまで」も1号が二年前に出たきりで、Next issue vol.3 未定、とあるのが気になった。高校生以来の夢のイバラがしょぼくてもらつては困るのだ。それでも「D#プロジェクト」として「井原デニム商品化コンテスト2014」が進行中で、「世界に発信する井原デニムの新提案」が用意されている。胸を撫で下ろす思いである。



井原鉄道と井原駅

ショップの女性におそわったのだが、組合加盟の工場は高屋町と西江原町に多い。井原鉄道でいうと高屋は二つ西寄り、西江原は一つ東寄り。ともに江戸時代から織物の町として知られていた。平成ならぬ昭和の大合併で井原市になるまでは、それぞれ宿場町だった。鉄道駅のあるところが市の立った旧七日市。

「宿場町?.....」

問い直してやっとわかった。現在の地図が頭にあるからいけない。中世以来の山陽道は福山から中国山地に入り、高屋、荏原(江原)、矢掛を経由して、総社へ出た。弥次喜多のころの旅人も参勤交代の大名行列も山間の道を通っていた。現在でこそ井原は奥まったところだが、かつては五街道の賑わいをもつ町だった。

駅前に「綿いっぱい運動」の標識があつて、綿がプラントに育っている。前の広場に立つとわかるが、超近代的な駅舎で、バスから見た白銀色の大屋根に三角錐の塔が組み合わされている。源平合戦の有名なエピソードだが、平家の女官が扇をひろげて挑発したのに対して、那須与一がみごと矢を命中させた。その弓と矢にあやかるデザイナーだという。「那須与一」と伝わるように東国那須野の若者^{なすのよいち}与一が、どうして備中の町とかわるのか? もともと当地の出であつて、那須一族の墓があるせいだという。たしかに木造よりも白銀の金属板がジーンズには合いそうだ。

旧山陽道は山裾をさうねっていく。たえまなく大型トラックの疾駆する国道とちがって、こちらは軽トラが行き来するぐらいで、古い家並みが残っており、弘法大師ゆかりの寺の山門前に、みごとな石の舟型手洗が据えてあつた。

「デニムの聖地」は、そのような界限である。すっかり宅地化されて面影はないが、かつては綿の畑がひろがっていた。春に種まきすると秋に白や赤の玉状をした綿が収穫できる。綿摘みである。備中は瀬戸内海をへだてた阿波と似て気候温暖であつて、阿波と同じく藍の栽培が盛んだ

った。綿と藍があれば、藍色の糸がつくれて、織物ができる。備中産は「厚手で丈夫」がキャッチフレーズで、参勤交代の下級武士たちが土産に買って帰った。坂本竜馬がいつも身につけていた小倉の袴は備中産だったといわれている。幕末の志士たちはおおかたが下級武士で、肩肘張っていても懐中はさみしかった。丈夫で長持ちする衣類はありがたい。竜馬らは幕藩体制のハミ出し者であって、二十世紀の反抗する若者の仲間とすると、使い古して褪せた藍色の袴は、当時のジーンズと比べていいのである。とするとイバラ土産はアメリカよりも先にデニムのジーンズを実用化していたことになる。

工場はどれも小規模で、「ジーンズ・カジュアル・マニユファクチャー」といった看板がないと、電気や車などの部品工場と思うところだ。輸入綿の紡績にはじまり、糸染め、糸巻き、のりつけ、防縮加工までが機械化され、一連の大きな機械が整然と動いている。ジーンズそのものができるのは別の工程で、生地が主体の井原は、縫製スペースがごく少ない。その一部をのぞいたら、ミシンにTOYOTAとあった。「どうしてトヨタ？」などと問いたいところだが、問う方がおかしい。世界の自動車メーカーは、もともとは豊田織物だった。トヨタ営業マンは車ならぬミシンの営業にとびまわっていた。イバラ・ジーンズは企画から裁断、縫製を一貫して行う手づくりハンドメイドの草分けである。はじめて知ったが、前ズボンのポケット縫いが最初で、つづいて前の中心部を先に仕上げ、ついで後ろポケット、尻ぐり、内股、脇、ベルト、ベルトループ、リベット打ち、裾上げ、そんなふうにつくっていく。ジーンズにはリベットがつきものなのだ。衣服に金属を打ちこむなど、衣服業界の目をむくようなことがジーンズには欠かせない。

ジーンズの登場は何を告げていただろう？管理社会が進むなかの小さな反抗、わざと粗野ぶったオシャレともいえる。貧しい若者や庶民だけでなく、インテリやエリートたちが、休日になると好んでジーンズを

身につける。たしかに有名なブランドや仕立てのこったヴィンテージジーンズともなると、高級なウールのズボンよりも高価なのだ。

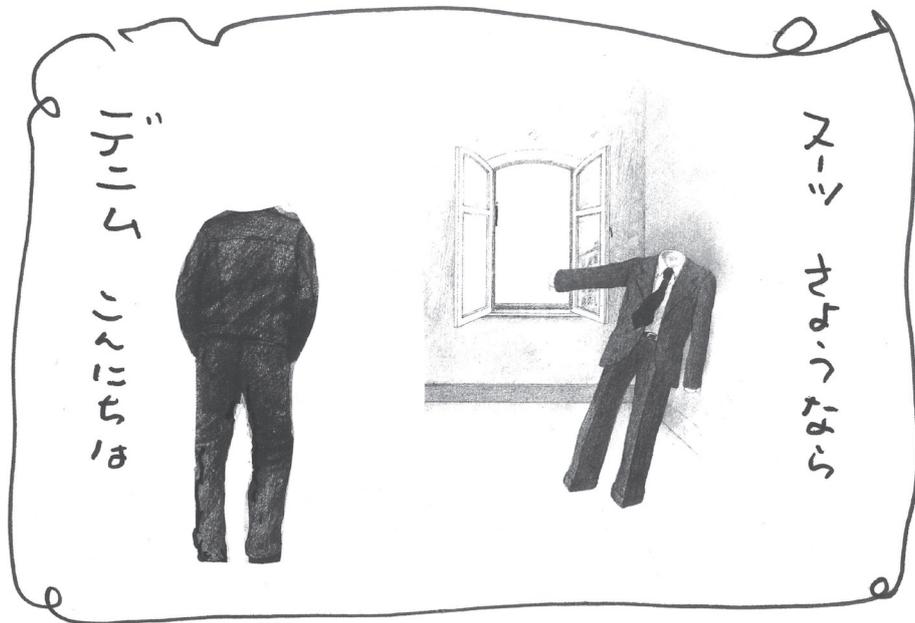
ジーンズはまた新しいエロスの発見でもあった。女たちが洗いざらしの粗布を身につけてあらわれたとき、女性の新しいエロスが誕生した。「ウエストサイド物語」がそうだったが、デニムにつつまれた若い女の肢体はなんとゆたかなエロティシズムを発散したことだろうか。値段の安さ、丈夫さ、気楽さ、あるいは異議申し立てのデモといったこと以上に、この「第二の皮膚」の出ず性的魅力が大きく日常化を進めたと思われる。

井原デニムの歴史には「GHQに販売」の一項がある。井原の業者たちは、戦後やってきたアメリカ兵を見て、彼らが日常にはいているズボンが、ながらく自分たちのドル箱だった厚地藍染衣類とよく似ていることに気づいた。GHQとは、アメリカ軍総司令部のこと。幹部クラスに販売をかけ、品質の高さを認めさせた。

一般への生産・販売に乗り出したのは昭和三十五年（一九六〇）ごろとあって、私はちょうど二十歳のときである。とすると自分など、まさしくジーンズ第一期生にあたるのだ。だからよく覚えているが、昭和四十年代にジーンズ中古品の大ブームがあつて、褪せた藍色のゴワゴワズボンが一般に普及した。恋人のジーンズのお尻に見とれたことを、いまなおまざまざと覚えている。ついでには井原デニム・ヒストリーより昭和四十五年（一九七〇）ごろのところ。

「ジーンズ年間一五〇〇万本、国内の75%の生産量」

このころが井原ジーンズのピークだったのではなからうか。倉敷市児島は井原に先立って縫製に専門化していた。普及と拡大にともない生産量は児島にとってかわられた。駅前広場にもどると、大勢の人がつめかけて、賑やかにおしゃべりしていた。内陸の井原へは瀬戸内からの車が魚類を運びこむ。メインストリートを少し行くと、「井原市地場産業振興センター」「井原市商工物産館」が肩を並べている。デニム生産はどの



ような比重をおびているのだろう。

卸売協会発行の「井原市ガイドブック」の「一つ一つ思いをこめた特産」の部の第一にジーンズが掲げられているが、ぶどうや乳製品と同じ扱いで、町の金庫は電気製品やハイテクの工業団地に向いているらしい。

魚市場が終了して、ジーンズの若い嫁が買い物を箱づめにして自転車にまたがり、さっそうと帰っていく。超ミニスカートの娘たちが広場のベンチでアイスクリームを舐めている。おだやかな山陽の秋の陽だまりのなかで、ジーンズ一期生は考えた。ジーンズが日常着として定着したのと、ミニスカートのはじまりは、ほぼ同じころだったような気がする。ミニスカートはイギリスのデザイナー、マリー・クワントが一九五九年に発表したものだった。いかにも大胆な試みであって、西洋のことわざにいう、「膝までは誰でも見られるが、それから上は夫だけ」、それを夫以外の目にさらすというのだ。

しかしながら、ミニスカートの驚くべきところは、はじめはおずおずと、そのあとは、あつというまに世界中に広まったということだろう。秘密の太腿が堂々と闊歩した。

老いも若きも、白人も黒人も黄色人も、脚に自信のある女もない人も、まるで申し合わせたように、いつせいに膝から上を見せはじめた。丸く、肉づきのいい大腿部のエロティシズムは、ジーンズの性的魅力と瓜二つといつていい。それはまさしくこの二十世紀の新発見というものだった。

ジーンズはその無骨なスタイルからして、あきらかにミュージズのままだった。童話におなじみだが、まま子はいっている苦難にもめげず、たくましく生長して、王の手から美しいお姫さまをかつさらう。ジーンズ一期生はなんとしても、たとえ少々遅まきにせよ「D#プロジェクト」に乗り出したイバラ・デニムに声援を送りたいではないか。

(いけうち おさむ)